九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芭蕉連句研究(二)：「けふばかり」の巻・「芹焼や」の巻

杉浦，正一郎

https://doi.org/10.15017/2332888

出版情報：文學研究. 51, pp.43-65, 1955-03-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

芭蕉連句研究 (二)

――「けふばかり」の巻・「芹焼や」の巻――

杉浦正一郎

「けふばかり」の巻（『韻塞』所收）

元祿壬申冬
十月三日許六亭興行

けふはかり人も年よれ初時雨　はせを
野は仕付たる麦のあら土　許六
油実を売む小粒の吟味して　洒堂
汁の煮たつ秋の風はな　岱水
宿の奥月へ入ほと古畳　嵐蘭
先工夫する蚊屋の釣やう　筆
才はりの傍輩中に憎まれて　水
焼焦したる小妻もみ消ス　翁
粽つむ笹の葉色に明わたり　六
輾磑をのほるならの入口　堂
半分は鎧はぬ人もうち交り　蘭
船追のけて蛸の喰飽キ　水
宵闇はあらふる神の宮遷し　翁
北より荻の風そよきたつ　六
八月は旅面白き小服綿　堂
焼山こえの雲の赤はけ　蘭
打起す畠も花の木陰にて　水
つらも長閑に鶴の卵わる　翁
春名ふかく隠者の富貴なつかしや　六
当摩の丞を酒に酔する　堂
さつはりと鱈一本に年暮て　蘭
夜着たゝミ置長持の上　水
灯の影めつらしき甲待チ　翁
山ほとゝきす山を出る声　六
児達は鮎のしら焼ゆるされて　堂
尻目にかよふ翠簾の女房　蘭
いかような恋もしつへきうす霙　水
琵琶をかゝえて出る駕物　翁
有明は毘舎門堂の小方丈　六
舌のまハらぬ狐やゝ寒・　堂
一すしも青き葉のなき薄原　蘭
篠ふミ下る筥根路の坂　水
宗長のうき寸白も筆の跡　翁

茶磨たしなむ百姓の家　六
花の春まつへて廻る神楽米　堂
七十の賀の若菜茎立　蘭

この連句が世に紹介されたのは、芭蕉死歿の翌々年、元禄九年の歳暮に成り、翌十年に京の井筒屋から刊行された許六・李由共撰『韻塞』に依つてゞあつた。『韻塞』は乾・坤の二冊から成り乾の巻は近江湖東、平田の明照寺の李由撰の体裁をとり、坤の巻は同じく彦根の森川許六の撰として、主に連句八巻、文章七篇を収めてゐる。それらの中には芭蕉の「許六離別詞」や「送許六詞」及び其角、杉風等の餞別吟、この「けふばかり」の巻、野坡許六・利牛三吟の「秋もはや」の巻等、許六の芭蕉入門当初の頃に成つたと思はれるものが多く見える。ところで『韻塞』は元禄十年の刊とはいへ、芭蕉晩年の弟子である許六にとつては最初の撰集であつたし、又、芭蕉入門当初の元禄五・六年の頃は彼の最も輝かしい思出の年月であつたのであり、それ故にこれらの作品は本集に採録されたものと思はれる。

さて、この歌仙の制作の年時、及びその場所は『韻塞』の前書に「元禄壬申冬十月三日　許六亭興行」と記されてあつて明かである。支考の『笈日記』にも「次の年ならん神な月三日の夜、許六亭にて哥仙あり、爰にしるさず」としてこの発句が見える。元禄壬申は元禄五年の事で、初冬早々の十月三日の夜に巻かれたものであつた。勿論こゝに許六亭と云ふのは、江戸糀町食違御門内にあつた彦根藩邸内の許六の江戸勤番中の亭の事である。許六は森川氏で俗称五助、名は百仲字は羽官、居を五老井と号し、菊阿仏・風狂堂・琢々菴等の別号がある。近江彦根藩井伊家の士で、三百石の禄を食み、武芸指南役を勤めてゐた。彼は又画技は狩野安信に師事して特にすぐれてをり、芭蕉が「柴門辞」に「画はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす、されども師が画は精神微に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず」と記してゐる程で芭蕉は彼に画を学んだと云はれてゐる。正徳五年に六十歳を以て癩瘡で歿したと伝へてゐる。許六が芭蕉に初対面し、その門弟となつたのは、この歌仙が巻かれた二ケ月前の元禄五年八月九日のことで、彼が七月に東下して間もない頃であつた。彼は俳諧に於ては芭蕉以前に特に師とした人はなかつた様で、たゞ大津の尚白に二三度対面したに過ぎなかつた。深川芭蕉庵の草戸を初めて彼が敲いたのは、桃隣の手引によつてゞあり、その折持参した四五句のうち特に「十団子も小粒になりぬ秋の風」の句が、芭蕉の賞讃を得たと云ふ事は、許六自身『俳諧問答』の「自讃ノ論」中に記すところである。扨て、一方芭蕉は元禄二年九月に『奥の細道』の旅を終り、其後足掛け三年間故郷伊賀の上野や、南都、京、湖南等に杖を曳いた。そして、元禄三年六月には膳所の珍碩（洒堂）撰の『ひさご』が成り、翌四年七月、京の去来・凡兆共撰の『猿蓑』が上梓された。ところで、この年十月初旬、平田明照寺に李由を訪うた芭蕉は、桃隣・支考を伴ひ、やがて此地を去つて美濃路、東海道を経て十一月一日、江戸に帰着した。その後暫く橋町に止まり、翌五年五月、杉風等の世話で成つた深川の新芭蕉庵に入つた。洒堂が深川に芭蕉を訪れたのは九月の事で、『深川集』所収の芭蕉・洒堂・嵐蘭・岱水四吟の「青くても」の歌仙が巻かれてゐる。又この「けふば

かり」の歌仙に次いで、同じく『深川集』に見える洒堂・許六・芭蕉・嵐蘭四吟の「洗足に」の歌仙も巻かれてゐる。その他『深川集』に見える芭蕉一座の歌仙は殆どこの頃成つたものであつた。ところで、この後芭蕉には市隠の生活が続き、六年秋には門を鎖ざして「閉関ノ説」が成り、この冬から翌七年春にかけて『炭俵』所収の歌仙が野坡等と同座して巻かれたのである。つまりこの「けふばかり」の歌仙は、『深川集』入集の歌仙と同じく、『猿蓑』と『炭俵』の中間に位置してをり、『猿蓑』の幽玄閑雅な風調から『炭俵』の軽みの風調への蕉風俳諧の展開を考へる上に大切な作品である。

けふばかり人も年よれ初時雨　　はせを

（釈）○発句。冬（初時雨）。

（評）　この発句は『笈日記』『芳里俤』『続猿蓑』『泊船集』『北国曲』等の諸集に見えるが、何れも同形で句形に異同がない。許六稿本『旅館日記』には「十月三日旅亭をたゝかれける日、初しくれのふりければ」として見えてをり、十月三日のこの日は折から初時雨が降りそゝいだのであつて、深川から許六亭に向ふ往路の初時雨の実感がこめられてゐるものと思はれる。蕭条と降りそゝぐ初時雨の物わびしい情趣、これは老年の心境にふさはしいものである。老境を解しない若い人々も今日だけは老いたる心境になつて、この初時雨の淋しい情趣を、しみ〴〵味はつて欲しいと云ふ意である。『師走鬱』に「初時雨のさひしき躰を若き人は心も付ヵし、けふ計は世の人に年をよせて哀を知らせたしとの句也」と述べ、『蒙引』に「折毎の景物を見て観感浅からさる、是のみは老の一徳といはん。されは人々も老の心になりて、けふの時雨を味ひ感ししるへしと也」と説いてゐる。尚『句選年考』には「許六壮年なり、よつて此句ありけるか」と見える。許六は当年三十七歳であり、彼の脇句に謙譲の気持が挨拶として込められてゐる様に思はれるので、『句選年考』の如くに解し、この日の会の主人許六に対する呼びかけ、挨拶の意を汲み取りたいのである。

さて、この歌仙に前後して巻かれたものに『深川集』所収の「洗足に」の洒堂・芭蕉・嵐蘭との四吟歌仙がある事は既述した。又、『笈日記』には「深川の草庵をとぶらひて」と前書した許六の「寒菊の隣もありやいけ大根」を発句とする芭蕉・嵐蘭との第三迄のものが収められてゐる。その他推定許六宛（元禄五年十二月八日付）芭蕉書簡には「此方御出被レ成候はゞ、十四日十五日十六十一二は御除被レ成候。他出之義知不レ申候。十八日十三日は慥に在宿可レ仕候」と許六よりの在庵日の問合せに対して都合の良い日を書送つてをり、又この年末の二十八日には「又々淡州公へ御見舞申候ハヾ、一宿がけに御尋と兼奉レ存候へ共、寒キ打（ママ）続候故春十日過ニと存候。其節伺公可レ仕候」と淡州公へ伺候のついでに一晩泊りで尋ねるつもりであつた事や、新春十日過ぎには必ず尋ねるつもりである事を書送つてゐる。又、許六の「自得発明辯」には「ひとゝせ江戸にて何某が歳旦開きとて、翁をまねきたる事あり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る」とあり、芭蕉は許六亭に続けて四五日も逗留する事があつたらしい。以上の事からも俳諧に執心する入門早々の許六と師芭蕉との交情が並々でなかつた事が考へられよう。芭蕉はこの新しい利潑らしい門弟によつて、停

滞する俳風を打破する意図でも持つてゐたのであらうか。何れにしても芭蕉が許六に豊かな希望を托してゐた事は、元禄六年五月六日江戸を去つて帰郷しようとする許六に送つた「柴門辞」や「送許六詞」によつても十分考へられる事である。

野は仕付たる麦のあら土　　許六

（釈）○脇句。冬（仕付たる麦）。○仕付る　種を播きつける事。

（評）初時雨の趣を受けて荒涼たる田園の初冬の景を付けたのである。初時雨の淋しげに降りそゝぐ野、見渡せば農夫が麦播きを終つたばかりの田畑の土は大小の土塊が累々として、青味一つない寒々とした景である。斯うした野の景色が許六亭から眺められたかどうかは疑問である。然し麦播き後間も無い田圃の荒れた様は誰しもよく寓目するところであらう。尚、この句には本日の席の亭主としての許六の「私は俳諧に手を付けて間も無い未熟なもので御座います」と云ふ挨拶の意が込められてゐる様に思はれる。

油実を売む小粒の吟味して　　洒堂

（釈）○第三句。秋（油実）。○油実　白木の俗名、タカドウダイ科の落葉喬木、葉は楕円形乃至広卵形で互生して尖り、托葉は二枚あつて披針形をなしてゐる。花は黄色小形で穂状花序、果実は球形、主に本州に産し薪材とする。種子は食用、または油を搾る。

（評）前句の仕付たる麦に麦播きも終つた感じを受け、而も脇までの野外の景を転じて、農閑期の百姓の有様を附けたのである。取込んで恐らく乾燥させたであらう油実を坪先にでも拡げ、売物にならない小さい実を取り除けるのである。それは貧しいなりにも温味のある生活の一齣である。作者の洒堂は浜田氏で道夕と称し、近江膳所の人で医を業としてゐた。初め珍夕、又珍碩と号し、洒落堂と称してゐたのを略して後、洒堂と改めた。元禄二・三年頃蕉門の人となり、元禄三年には『ひさご』を撰んでゐる。元禄五年九月、東下して芭蕉庵を訪れ、翌六年一月末迄滞在してをり、この折の俳諧をもとに『深川』を撰んだ。帰郷後夏、難波に居を移し、『市の庵』の撰があつた。後、又膳所に帰つたらしく元文二年歿してをり、享年は不詳である。撰集にはこの他『白馬』（同十五年刊、正秀共撰）がある。

汁の煮たつ秋の風はな　　岱水

（釈）○四句目。秋（秋の風はな）。○風はな　現在では晴天にちらつく雪、或は風の吹き出る前に少し降る雪の事を云ふ様であるが、古くは雪に限らず、風の吹く前にちらつく雨の事を云つた様である。季も冬に限らなかつたのであるが、雪の事を云ふ様になつて冬になつた。こゝも雨の事であらう。

（評）前句の農家の閑仕事に、同じく山家の囲炉裏辺のわびしい閑なる景をつけたのである。炉火に煮えたつ晩食の汁、あたりに人気のないまゝにさかんに湯気が白く立つてゐる。ゆがんだ建具、破れた障子の外には夕暮の風に小さい雨がちらつく、吹き入れる風に湯気が流れる。この句の作者岱水は江戸深川の芭蕉庵の近くに住し、明暮芭蕉に親炙した門人である。初め苔翠と号し、貞享四年の『続虚栗』頃からの古い蕉門俳人で、この頃改号してをり、宝永年間歿した様である。彼には宝永元年『木曾の谷』の撰があるが、その野坡の序に「深川の芭蕉庵に軒をならへて、風雅はもとより師にいたゝき、こゝろざしは親のことくにつかえ侍るは中にも岱水なり。翁もいつくしみことに思ひ給へり」とあり、彼の

生活を覗はせる。

宿の月奥へ入るほど古畳　　嵐蘭

（釈）○五句目。秋（宿の月）。月の定座。

（評）前句を旅宿の汁鍋の煮えたつ様とみて、此句を宿屋と解する事が出来るが、この宿を自分の家の事に取る方が面白い。皎々たる月光が屋根先から部屋の中に差し込むにつれて、照し出されていくものは一層古びた破れ畳である。奥へ入ると云ふのは、月光が奥の方に差し込んでいくと云ふのであらう。前句のわびしい情趣に同趣の句で良く応じてゐる。作者嵐蘭は松倉氏、又五郎と称した。『風俗文選』の「作者列伝」によると、武士であつて板倉家に仕へてゐたが、諫言して入れられず官を辞し、母と共に江戸浅草に移り住した。其角の『雑談集』によると彼の母は肥前島原の松倉豊後守の家老であつた田中宗夫の孫に当る人で、この事と彼の旧主家板倉家があやまられて、彼自身島原の松倉家に仕へたが、主家没落して浪人となつたと云ふ事が通説として行はれる様になつたと思はれる。彼は延宝八年の『桃青門弟独吟二十歌仙』の作者の一人で、芭蕉の「嵐蘭誄」に「予と因む事十とせあまり九とせにや」とあり、延宝三年頃に芭蕉に入門したと思はれ、其角・嵐雪に次ぐ蕉門の古い門人である。元禄六年八月、鎌倉の月見に行き、帰途病を得て八月二十七日歿した。享年四十七歳。芭蕉はその死を悼んで「嵐蘭誄」を草してゐる。

先工夫する蚊屋の釣やう　　筆

（釈）○六句目。夏（蚊屋）。

（評）前句の宿を旅宿と解し、古畳のしかれた粗末な宿屋、一日の行程を終つても早々自身の手で蚊屋の釣り方を考へねばならないのである。空には大きな明るい夏の月がかゝつてゐる。作者の「筆」とあるのは執筆（しゅひつ）の事で連句を筆録する人、連衆の一人がこれに当る事もあり、他に別の人が当る事もある。こゝではそれが誰かは分らない。

才ばりの傍輩中に憎まれて　　水

（釈）○初裏一句目。雑。○才ばり　小利口で思慮浅きもの。○傍輩　なかま、同僚。

（評）前句の蚊屋の釣やうを先づ工夫すると云ふ事に、才はじけ者の様を感じ、さうした才ばりのかへつて同輩に快く思はれず、爪弾きされて憎まれてゐる事を付けたのである。初表の自然の景が数回続いたのに対し、このところ暫く人事が続いてゐる。

焼焦（タキコガ）したる小妻もみ消ス　　翁

（釈）○初裏二句目。雑。○小妻　小褄。衣服のつまさき。

（評）何かの拍子に衣服のつまさきを火にやき焦して、あわてゝ手で揉み消す。前句の傍輩に憎まれる才ばり、その人物の憎らしい感じに快き失敗の様を以て応じた句である。

粽つむ笹の葉色に明わたり　　六

（釈）○初裏三句目。夏（粽つむ）。○粽つむ　出来上つた粽を積み並べる。○明わたり　夜もすつかり明け渡る事。

（評）前句の小褄を焼き焦すのは何か忙がしい仕事の折と見て、粽をさかんに作り並べる餅屋のさまを付けたのであらう。節句前

か或ひは何か急な入用事で、夜を徹して粽を作り、蒸して出来上つたものを積み並べてゆく、その粽の笹にはや夜も明けて朝の光が差し入る。笹の葉の鮮な青さが目に泌みる様である。

輾磑（テガイ）をのぼるならの入口　　堂

（釈）○初裏四句目。雑。○輾磑　『平城坊目考』に「尋尊僧正七大寺巡礼記ニ曰ク、天平ノ朝、瑪瑙輾磑、東大寺ノ食堂厨屋ニアリ。コレ高麗国ノ貢グ所ナリ。ソノ西門ヲ謂ヒテ輾磑トイフ。云々」とあり。奈良東大寺西門の事を云つたのであるが、後にはその辺の坂を輾磑坂と云ふ様になつた。今は普通、手貝と書く。

（評）奈良の入口のてがい坂を上つて行くといふのである。前句の粽を作る忙がしい様に、早朝の旅の首途の様を付けたのである。ところで、この句は他処から奈良の町に入ることにもとれさうである。然しさう解するにはてがい坂を下りるのでなければならない。この坂を下りて奈良の町に入るのだから、前の様に解した。

半分は鎧はぬ人もうち交り　　蘭

（釈）○初裏五句目。雑。○鎧はぬ人　鎧を着てない人。

（評）前句の東大寺西の坂を上つていくと云ふ事から、東大寺、興福寺などの僧兵達の様をつけたのである。奈良・輾磑等から、それに適はしい僧兵が描き出された事は聯想としては当然な事であらう。さうした事を半分は鎧はぬ人の言葉によつて描き出してゐて、僧服のまゝに襷を掛け、太刀を佩き長刀を携へるもの、或ひは腹当を付けて鎧ふ物々しい様が如実に描出されてゐる。尚、この句に『大平記』の大塔宮が般若寺に隠れた折の事などが想起される。

舩追のけて蛸の喰飽キ　　水

（釈）初裏六句目。雑。

（評）この句、漁船を追払つて喰ひ飽きる程ふんだんに蛸を食べると云ふのである。蛸は海浜に陸揚げされてゐるものとも取れるが、こゝは蛸壺などであらうか。蛸壺を引き揚げてゐる漁船を追ひやり、これを引き上げて蛸を捕へて食べるのである。勿論熟湯などに漬けて茹蛸にして食ふのであらう。前句の半分は甲冑を付けてゐないと云ふことから、一の谷の合戦などを連想させる様子をつけたのであらう。この辺りの海岸は蛸が多く獲れる処であり、『甲子吟行』の折には芭蕉も明石で有名な「蛸壺や儚き夢を夏の月」の吟があつた。

宵闇はあらぶる神の宮遷し　　翁

（釈）○初裏七句目。秋（宵闇）。○宵闇　あかつきやみに対する言葉で、満月後の月の出前の闇をいふ。俳諧に於いては陰暦八月十九日以後の月の出る前の闇をいふ言葉として用ゐられ、秋の季語である。○あらぶる神　荒振神、兇暴な神。○宮遷し　遷宮の事で、神宮・神社の神座を遷す事。

（評）前句の荒々しい、とりしまりのない様に祭事の趣を感じ、宵闇の遷座祭を付けたのである。宵闇の宮遷しは暗闇祭とも云はれてをり、これは神霊降臨の形式が深夜黎明の発する直前であつたと考へる思想から出たもので、祭の中心である神霊の遷座を夜間、燈火を滅した暗闇をえらんで行ふ祭で、特に武州の大国魂神社、山城の県神社、摂津の西宮神社の祭が知られてゐる。西宮神社の

大祭は九月二十二日なので、こゝは西宮の恵比須神社の暗闇祭の事を云つたのではないかと思はれる。この神社の祭神の中には須佐之男神も合祀されてゐるのである。尙、こゝの附合を石兮の『附合集評註』には「ともにとりしまりなき其夜のありさま、世にはある事なり」と評してゐる。ところで注目される事はこの後句の月の座には月が出てゐず、この宵闇が月の句として用ゐられてゐる事である。打越に八月として月が出てゐるが、これは月並の月で賞翫の月ではない。この事については李由・許六共撰の『宇陀法師』に「深川集俳諧に宵やみと云句賞翫の月にせり。師云、宵闇と云句に月は成まじ、此宵やみ月秋の前句也、是を月にすべしとて秋を付出し、八月と云月次を出せり。（中略）月秋の場所に宵闇出合たればこそふしぎの働も有けれ」と述べられてゐる。つまり月の座の歩に宵闇が出たので、宵闇に月の句は付け難いのでこれを賞翫の月にしようと次句に秋を付け、宵闇を月に代用したのである。引用文中『深川集』とあるが、本歌仙は『深川集』の歌仙と同じ頃巻かれ、且つ『深川集』にはこれと前後して興行された許六一座の歌仙が収録されてゐるので、これは許六の記憶違ひによるものと思はれる。一方『去来抄』には連衆の一人洒堂の言葉として記されてゐる。即ち「洒堂曰、深川の会に宵闇の句出たり。先師曰、宵闇は則月句中に有、外に月の句作せんは拙なかるべしと直に月に用ひ、扨表に月を見せざらんもいかゞと月並の月の字を入らるゝといへり。可有事と思へり。その後風国会に宵闇の句出る。予いふ、先師已に此式を立らるゝ上はいざ其法にならはんと、是を月に用ひ侍りぬ」とみえる。宵闇の句の中には月が含まれてゐるので、別に月の句を付けるのは都合が悪いと云ふので直ちに月の句に用ゐたと云ふのである。この文中風国の会と云ふのは、風国撰『初蟬』入集の去来・風国の両吟の「放すかとはるゝ家や」の巻を指すものと思はれる。同歌仙初折の裏八句目から、

あとの月より屋ちんあけらる　　去来
大きなる声してもどる粉糟買　　風国
蚊のたかりたる宵闇の空　　去来

の付合が見える。この方は月並の月が先に出たので、次に宵闇によつて月を含ませたのであつて、この場合の芭蕉の捌きを逆に適用したものであつた。ところで宵闇を月に用ゐる事に就いての説は『宇陀法師』『去来抄』以外に、『三冊子』『二十五箇条』『俳諧十論』等の諸書にも見え、蕉門に於いて可成り重要視されてゐた説であつた様である。そしてこの付合に、法式にとらはれず、一巻の変化と実感を重んじた芭蕉の連句制作の態度が窺はれるのである。

北より荻の風そよぎたつ　　六

（釈）○初裏八句目。秋（荻の風）。○荻の風　『栞草』に「七月。荻の風、荻の声（中略）荻の葉に風わたりて音するを荻の声とも荻の上風ともいふ」。「荻の風北より来り西よりす　几董」。

（評）この句は支考の『俳諧十論』に「宵闇に月の付かたければ荻に神風の威霊をあしら」つて付けたものと述べられてゐる。併しこれは前引の『宇陀法師』に「月秋の前句を月にすべしとて秋を付出し、云々」とあるのを取るべきであらう。即ち宵闇の前句を完全な賞翫の月の句とする為に、典型的な秋の句を続けたもの

と思はれる。荻は『歳時記栞草』に「荻の上風は芒・葛の葉と共に秋景の特色をなすもの、芒と葛は山野の秋を代表し、荻は水辺の秋を代表す」と記されてゐる如く秋景の代表的な植物なのであり、秋の遷座祭にふさはしい景をあしらつたものであつた。

八月は旅面白き小服綿　　堂

（釈）○初裏九句目。秋（八月）。小服綿　頴原退蔵博士『江戸時代語の研究』に、僧侶もしくは法体した人の着用する衣類であり、盛服でないものと云ふ解が見える。コブクメとも云ひ『続猿蓑』に「小服綿に光をやどせ玉つばき」の角上の句がある。角上は江州堅田本福寺の僧である。

（評）荻の葉に風がそよぎはじめ、風景殊に趣きを加へきたつた秋、山野の情趣を愛して旅に興ずる小服綿姿の風雅人を描き出したのである。前句のそよぎたつの言葉に風流人の旅への思ひが想起されたものと思はれる。八月の月の字は前掲の『去来抄』その他に見える如く宵闇が月に用ゐられた為、字面に月が全然出ないのは淋しいと云ふので、文字の上から用意されて付け出されたものであつた。

焼山ごえの雲の赤はげ　　蘭

（釈）○初裏十句目。雑。○焼山　噴火山。○赤はげ　草木が生えず赤土を露出してゐるところ。

（評）焼山の上を漂ひ流れて行く白雲、それが丁度火山の赤はげた部分を覆ふ様にかゝつてゐると云ふので、小服綿姿の旅人が眺め得た旅中の一景と解すべきであらう。

打起す畠も花の木陰にて　　水

（釈）初裏十一句目。花の座（花の木陰）。春。○打起す畠　荒地の開墾ともとれるが、冬の間凍てついた畠を耕してゐる情景と解しておく。

（評）花の定座であり花をこぼす事は喜ばれないので、焼山ごえの雲を春景とみてとり、山麓の畠打ちを付けたのである。或ひは焼山を野焼の山と見かへ、春の景にしたのではないかと思はれるが、前解の方をとつておく。

つらも長閑に鶴の卵（カイ）わる　　翁

（釈）初裏十二句目。春（長閑に）。

（評）前句に春ののんびりした趣を感じ、春光を浴びながら巣の中で、卵を啄き割る飼鶴ののどかな様を続けたのである。鶴の巣を営む様を眺めてゐるのは富有な隠者の山荘での事であらうか。当時の富豪は鶴を庭園に飼育してゐたものもあつたらしい。芭蕉には発句に「花咲て七日鶴見る麓かな（『一橋』）「うめ白しきのふや鶴をぬすまれし」（『野晒紀行』）等の作がある。後句は三井秋風の京鳴滝の山荘で詠つたもので、西湖の孤山に住し、梅林に隠れて鶴を愛したかの宋の林和靖の故事によつたのであつた。尚『付合評註』は「春色目前、とかば第二義に落つべし」と評してゐる。

春ふかく隠者の富貴なつかしや　　六

（釈）名残表一句目。春（春ふかく）。○富貴　当時のよみぐせとして「ふつき」とよんだ方が良からうか。

（評）前句の飼鶴に直ちに林和靖や三井秋風等の隠者の事を想起

したものと思はれる。春も将に過ぎゆかうとする頃、さうした残り少い春の情趣をゆつくり味ひ楽しめる富有な隠者が、なつかしくしたはしく思はれると云ふのである。

当摩の丞を酒に酔する　　堂

（釈）名残表二句目。雑。○当摩の丞　仮設の名であらう。大和葛城郡の当摩寺の僧官か。

（評）前句の中世的な匂ひに同じく中世的な、やゝ古い人名を持ち来つたのであり、裕福な隠者が、当摩の丞に酒を饗応して、その酔うた様を見て興ずる豊かな生活である。前句の富貴から富貴を象徴する牡丹の花が想起され、続いて牡丹の名所である当摩寺へ連想が移つたものと思はれる。

さつぱりと鱈一本に年暮て　　蘭

（釈）名残表三句目。冬（年暮て）。

（評）鱈一本とあるからこの鱈は干鱈であつて、それは干鮭と共に貧家の菜に供せられたものである。僅か一本の鱈を年越の夜のものとして何の未練気もなく、さつぱりと古年を送ると云ふので、貧しい浪人者の様である。前句の酒宴を浪人者の貧交と解した付句である。

夜着たゝみ置長持の上　　水

（釈）名残表四句目。雑。○夜着　夜のもの、蒲団。

（評）長持の上には夜の物がきちんと畳まれ重ねられてゐると云ふので、貧しい小家の大晦日の夜の様である。

灯の影めづらしき甲待チ　　翁

（釈）名残表五句目。雑。○甲待　きのえねまつり（甲子祭）の事で、甲子の日は夜の子（ね）の刻まで起きてゐて大黒天を祭つた。一年中に六回あり、十一月の甲子を特に祭つた。近松の『大経師昔暦』に「今日はあしたのきのえねと知らで逢ふ夜のその報世上の口にうたはれて」とある。『日次記事』の正月の条に「凡一年中六甲子夜、禁裏被レ祭レ子（中略）凡毎二甲子一民間買二燈心一、其内以二十一月甲子一為レ最（中略）六甲子夜祭レ子、是謂二子祭一」と見える。

（評）前引の『日次記事』に見える如く甲待の夜は民家では新しい燈心を買ひ求めたので、この夜は神棚にそなへられた燈火の明るさが、殊に目新しく思はれたのである。この付合を土芳の『三冊子』には「前句の置の字の気味に、せばき寐所、漸一間の住居もの取片付て掃清めたる所と見込、わびしき甲待の躰を付たる也。珍の字ひかりあり」と述べてゐる。『付合評註』にも「長持の上に夜着たゝみ置きて、寝もせぬやうすを、きのえ待と思ひよせたるなり」と述べてゐる如く、夜着を畳んだまゝにしてあるところから、夜遅くまで起きてゐる状態をみとり、甲待の夜の様と解したのである。それは民間信仰を忠実に行ふ中小階級の談話に狂ずる夜である。

山ほととぎす山を出る声　　六

（釈）名残表六句目。夏（山ほととぎす）。

（評）永い間山住みしてゐたほととぎす、初夏の訪れと共に山を出てとぶ。暫く聞かなかつたそのほととぎすの声を新しく聞いた珍しさ、それは前句の甲待の夜の灯火のめづらしさに相応じたも

のであつた。必ずしも甲待の夜、ほとゝぎすの鳴声を聞き付けたと解しなくてもよからう。こゝは遁句で軽い付合である。

児達は鮎のしら焼ゆるされて　　堂

（釈）名残表七句目。夏（鮎）。○児達　ちごたち　寺院で召仕ふ童児。○鮎のしら焼　鮎をそのまゝ何にもつけず素焼する事。

（評）湖中の『鳶羽集』には初音の僧正などの俤と解してゐる。初音の僧正は権僧正永縁のことで「聞くたびにめづらしければ郭公いつも初音の心地こそすれ」（『金葉集』）の歌によつて斯く呼ばれたと云ふことが『平家物語』にも見えてゐる。こゝは初音の僧正の様な風流な僧が、珍らしいほとゝぎすの初音を聞いた喜びに、児達に鮎の素焼をふるまつたと云ふのである。それに児、鮎のしら焼の新鮮な感じがほとゝぎすの初声に響いてゐる。

尻目にかよふ翠簾の女房　　水

（釈）名残表八句目。雑。○尻目　後方を見やる目遣ひ。ながしめ。

（評）翠簾の内にゐる女房を尻目に眺め乍ら通つて行くと云ふので、その主格は児達であらう。尻目を遣ひ乍ら翠簾の外を女房が通ふと解する説があるが、さう解するのは翠簾の女房の言葉からやゝ無理であり、句意にも難がある。これは前句の山寺の趣と解し、王朝時代、屢々行はれた女房たちの山寺詣りを持ち来つたものと思はれる。翠簾の向ふに籠りゐるなまめかしい女房に児の好奇な瞳は投げられる。

いかやうな恋もしつべきうす霙　　水

（釈）名残表九句目。冬（うす霙）。恋の句。

（評）屋根、庭、道に降りそゝぐ霙、この天来の使者は人をして過去を回想せしめ、未来の期待に導く。さまゞ〳〵な恋を経て来たそしてこの後又どの様な恋にうき身をやつす事であらう。前句の持つなまめかしさに恋の趣を感じ、恋の句を付けたのである。ところでこの句の主語は翠簾の女房ととる事が出来る。そして又、女房自身の独白とも、第三者が女房の身の上に思ひやつた躰ともとれる。併し、いかやうな恋もしつべきの独白の強さから主語は別に男の様に思はれる。それは風流の貴公子、業平や光源氏の如き男の述懐であらう。

琵琶をかゝえて出る駕物　　翁

（釈）名残表十句目。雑。○駕物　のりもの。

（評）『付合評註』に「古ものかたりにもあるべきおもかげを思ひよせて、琵琶をかゝへて乗物より出づる人は、何かしの君のいろこのみなるべし」と評してゐる如く、王朝風な物語にもある様な人物の趣である。うすみぞれの空に恋の歎息をもらす風流公子の様である。尚、芭蕉にはこの他に「畳に琵琶をどつかりと置」の付句が『鳥の道』に見えてゐる。

有明は毘舎門堂の小方丈　　六

（釈）名残表十一句目。月の座（有明）。秋。○毘沙門堂　四天王の一である毘沙門天（多聞天）を祭る堂。○小方丈　寺院の住持の起居する建物。こゝはその小なる建物をいふのであらう。

（評）有明の月に浮ぶ毘舎門堂の小方丈の眺めは、愛すべき趣深いものがあると云ふのであり、前句の古典的なさびた世界、琵琶

法師等の連想から中世的なさびた世界を想起したのであらう。連歌などによく毘舎門堂の花の下の会などと云ふのが見える如く、毘舎門堂は鎌倉室町時代に雅会の場所として行はれてゐたものと思はれる。

舌のまはらぬ狐やや寒　　堂

（釈）名残表十二句目。秋（やゝ寒）。○やや寒　やゝさむと読む。秋も末になつて漸く寒さを覚ゆるを云ふ。

（評）漸く寒さを感じる季節、何処からともなく狐の鳴く声が聞えてくる、その呂律のまはらぬ鳴声にそゞろ寒さを覚ゆるのである。これは鞍馬あたりの夜明の感じであらう。軽いユーモラスな気持で付られてゐる。

一すじも青き葉のなき薄原　　蘭

（釈）名残裏一句目。秋（薄原）。

（評）見渡す限り一面の薄原、草は枯れ果てゝしまつて一筋の青い葉も見えない、蕭条たる野山の様である。この句は前句に続いて狐の出そうな場所を描き出してゐるのである。

篠ふみ下る筥根路の坂　　水

（釈）名残裏二句目。雑。

（評）前句の一面の薄原を箱根路の様と解したのである。今でも箱根の辺りには薄が多い。広い薄原を通り、篠笹を踏み分けて坂を下り、旅人は箱根八里の嶮を越えていく。

宗長のうき寸白も筆の跡　　翁

（釈）名残裏三句目、雑。○宗長　室町末期の連歌師柴屋軒宗長。十八歳で法師になり、宗祇の門に入つた。四十余年の久しい間宗祇に師事し、師に仕へる事極めて厚く、宗祇に影の形にそふ如くつき従つた。享禄五年、八十五歳で歿す。○寸白。すんばく、すばくとも云ふ。古く『今昔物語』にも見えてをり、これは女の疝痛で、寸白虫（さなだむし）に因るものと思はれてゐた様である。『倭訓栞』にはふぐりかぜの事としてゐて、男子のみの病とも考へられてゐた様である。現在の何の病気に当るのかわからないが「此の寒気で寸白でも起こつたか」（『川中島合戦』）や、素覧の「木がらしやそば杖にあふ寸白持」（『続山彦』）の用例から考へると、寒気によつて起る疝痛の様に思はれる。

（評）箱根の坂から宗祇がこゝで苦しんだと云ふ事を記した宗長の『宗祇終焉記』の事を思ひ浮べたのである。同書には「廿九日（注、文龜二年七月）駿河国へと出で立ちぬるに、その日の午刻ばかりにみちのそらにして、すんばくといふむしおこりあひて、いかに共やるかたなく、こしをたてゝ薬をもちふれども、いさゝかのしるしもなければ、いかゞはせん、こう津といふ処に旅宿をもとめて、一夜をあかし侍りしに、駿河よりのむかへの馬、人こしなども見えて、云々」と見える。句意は昔、この坂で宗長を憂へさせた師宗祇の寸白の病も、今日、宗長の筆の跡として残されてゐるに過ぎないと云ふのである。芭蕉が宗祇を敬慕してゐた事はこゝにあげる迄もなく周知のことであらう。

茶磨たしなむ百姓の家　　六

（釈）名残裏四句目。雑。○茶磨　茶摺鉢　葉茶をすつて粉末に

する摺鉢。『俚言集覧』に「昔、未だ茶臼のなかゝりしとき、挽茶を摺りて抹茶にするに用ひたる茶挽」とある。○たしなむ　『鳥の道』の「秋ちかき」の巻の芭蕉の付句の「木に十ばかり柿をたしなむ」や『菊の塵』の「白菊の」の巻の何中の「出がはり時の一歩たしなむ」の語意は心がけて大切に貯へておくの意である。これから考へるとこゝの場合は愛蔵すると云ふ意に解される。

（評）百姓の家に伝世の古い茶摺鉢を愛蔵してゐると云ふ意、これは水呑百姓と違つた田舎の由緒のある豪農であらう。筆の跡の古さに茶磨の古さで応じたものである。

花の春まつべて廻る神楽米　　堂

（釈）名残裏五句目。花の座（花の春）春。○まつべて　まとめ集める事、まつめるともいふ。「傘をまつめてくゝる春の空　木而」（『百曲』）○神楽米　里神楽などの費用に当てる為に氏子の家から奉加を求る米。

（評）桜の咲き乱れるのどかな春、郷社などでやる里神楽の費用に弁ずる米を、氏子の農家各戸から集め廻ると云ふ意で、前句の百姓の家から田舎の古い慣習を思ひ寄せて付けたのである。

七十の賀の若菜茎立　　蘭

（釈）挙句。春（若菜）。○七十の賀　古稀の宴。○茎立　なつぱの薹。

（評）古稀の祝ひに用ゐた野菜の残りが、畠のあちこちで薹を高く立て春風に揺れ動いてゐる。陽光はあたりの野面にあふれてゐる。うらゝかな景色である。前句の農村ののどかな趣に応じてゐる。挙句として先づ無難なめでたい句である。　（完）

「芹焼や」の巻（『鄙懐紙』所收）

芹焼やすそ輪の田井の初氷　芭蕉
挙りて寒し卵産む鶏　濁子
織下す絹をむしろに尋取りて　涼葉
折〳〵すゞむうらの柿の木　蕉子
うす月夜干鰯俵のなまぐさき　葉子
汐くむ牛も見えぬあさ霧　蕉
露霜の小村に鉦をたゝき入　蕉
榎のすへにのこる注連縄　葉子
求食飛塊鳩の賑はしく　葉
堀ばひらちにならぬ石原　蕉
日ざかりは孫に吸筒提させて　子
和田秩父とも独若党　葉
懸乞の来ては言葉を荒シける　蕉
余所よりくらき月の枝折戸　子
蟲とりと知らで蠶の雇はれて　葉
松もすゝきも念仏の種　蕉
富ばなほ命也けり花の陰　子
破籠はさめぬ鶯のこゑ　葉
雪国は春まで馬の繋がれて　蕉
日記つまりし一帖の紙　葉
旅瘡やながき五月の船どまり　子
名残りをかせぐ安芸の広島　蕉
音信は見しらぬ伯母もなつかしく　葉
元米計る酒の奥殿　子
焼たてゝ庭に鰻するくれの月　蕉
まき藁まくも肌寒きかぜ　葉
寄り聟は仮り諸太夫に粧ふて　子
うき名は辰の市で恋する　蕉
よひ縞ともやうを褒て詠やり　葉
葉茶壺直す床の片隅　子
ほと〳〵ぎすすはやと蚊帳釣かけて　蕉
湖水もしらむ瀬田の朝駕　葉
うす雪のうへに霰のころ〳〵と　子
俵の蘆をたゝく著る物　蕉
折る花に子共のすがる袋町　葉
若松うゆる天神の宮　子

（『鄙懐紙』）

本歌仙は『鄙の懐紙』所載のものである。『鄙の懐紙』は現在伝本不明で、『金蘭集』等所収の連句の出典にその名が見えるところから、その名が知られるのであつて、他に『鄙の懐紙』所収と伝へられる芭蕉一座の歌仙が数巻ある。それらは何れも濁子・涼葉・此筋・千川・左柳・大舟等の美濃大垣藩の門弟達との間に巻かれたもので、『鄙の懐紙』は或ひはこれら連衆の誰れかによつて編まれたものかも知れない。『芭蕉句選年考』は「元禄六年十一月の吟也。鄙の懐紙に酉の霜月とありて」としてこの歌仙に言及してゐる。この歌仙制作の日を元禄六年十一月とすることは、その他のことから考へても大体信じて良いものと思はれる。元禄六年と云ふと芭蕉はこの春、自ら二十年来手塩にかけたと云

ふ、かの猶子桃印を失ひ悲歎のどん底に沈んでゐたのであり、寿貞尼・まさ・おふう・次郎兵衛等の系累達も芭蕉庵に同居してをり、種々な煩悶や苦悩が芭蕉を襲つてゐた。そして俳席と縁遠い日が続いてゐた。かの「閉関の説」を草して客を辞したのは初秋の頃であるが、それは斯うした芭蕉の内的な苦悶の挙句であつたらうと思はれる。中秋、閉関を解いてから芭蕉の最後の俳諧生活が再び活潑に開始される。『炭俵』や『続猿蓑』やこの『鄙の懐紙』所収の歌仙がそれである。これら一連の俳諧は長い間芭蕉の胸中に胚胎育成されて来たと思はれる「軽み」の理念を、具体的に作品で以つて追究したものであり、芭蕉最後の俳諧の風調を覗はせるものである。

尙、本歌仙制作の場所であるが、脇句の濁子は大垣藩士なのでその江戸詰の大垣藩邸と思はれる。『大武鑑』によると元禄から宝永にかけて美濃大垣十万石戸田爲女正氏定の屋敷は上屋敷は呉服橋内、中屋敷は牛込、下屋敷は霊巌島、下や金杉にあつた。今濁子の家がこれらの屋敷のどのうちにあつたかを明らかにしない。然し憶測を加へれば濁子・涼葉等と芭蕉は屢々行き来をしてをり、特に涼葉は従来、深川住と推定されてゐた様であるから、それらの屋敷は深川の芭蕉庵から余り遠くはなかつたと思はれる。

次に作者について一言しよう。濁子は中川甚五兵衛と云い、美濃大垣藩の江戸詰の士、蕉門俳人としては古参で既に天和三年刊の『虚栗』にその名を記されてゐる。以後芭蕉との交情は長い間変らず、芭蕉は元禄七年十月、大坂の客舎で死歿の折には「甚五兵衛殿へ申候。永々御厚情にあづかり死後迄も難ゝ忘存候。不慮なる所ニ而相果、御暇乞も不レ致互ニ残念是非なき事ニ存候」云々の遺書を濁子によせたのであつた。又濁子は大石内蔵之助と交友があり、大石から形見の脇差を贈られたが、彼の自刃後脇差を泉岳寺に納めたと云はれる。斯うした事は濁子の人柄を語るものであらう。

涼葉は同じく美濃大垣の藩士、上田儀太夫と伝へられる。『大武鑑』の宝永二年のところに戸田侯の藩邸を記した後、五人の藩士名が見えるが、その内に上田義太夫の名がある。同列三人中の二人は次年のものには「御城使」の肩書が加へられてゐるので、恐らくこの上田儀太夫は宝永二年頃には御城使を勤めてゐたものと思はれる。

芹焼やすそ輪の田井の初氷　　芭蕉

（釈）○発句。冬（初氷）。○芹焼　竹冷編『芭蕉句集講義』に享保十五年版『料理綱目調味抄』をあげて、「先づ地を掘つて其所へ石を列べる。どん〳〵その石の上で火を焚いて石を焼く。その上に芹を載せて何かで覆をする。多少その上でも火を焚いて蒸焼にする。焼けたら取出して適宜の大さに截つて、柚醋を絞り込んで醤油を注けて食するのである」と記してゐる。又『俚言集覧』の「鍋焼」のところには「鍋焼。鳧・雁などの切身に、芹・慈姑・麩・蒲鉾・蓮の根などやうのものを入て、醤油の汁にて、薄鍋にて煮たるものをしかいふ。又芹焼ともいふ」と見えてゐる。これは畢竟既に志田義秀博士が『芭蕉俳句の解釈と鑑賞（後編）』中に指摘してゐられる如く二種の芹焼があつたものと思はれる。そしてこの句の場合は『卯辰集』所収「馬かりて」の歌仙の「銀の小鍋に出す芹焼　曾良」と同じく後の鍋焼を云つたものと思はれる。

○すそ輪の田井　孟遠の『桃の杖』に「すそ輪の田井は山のすそに有田井也」とある如く、山麓のあたりの田井である。『万葉集』にも「筑波ねのすそわの田ゐに秋田刈るいもかりやらむ紅葉た折るな」等すそわの田ゐの語はいくつか見える。この田ゐは田居で単に田の意味であるが、芭蕉は田の井の意味で使用したのではなからうか。

（評）『方丈記』に「又、ぬかごをもり、芹をつむ。あるはすそわの田井にいたりて、落穂をひろひてほぐみをつくる」と「芹」「すそわの田井」の語が見える。又『挙白集』の「東山山家記」に「からごろもすそわの田井にねぜりをつみ」、「西山山家記」に「けふは大原野のすそわの田井に根芹をつむすことなる」（ママ）とある。前引『桃の杖』にも「是も挙白集より見出されたり。『すそ輪の田井の芹』と云事一集の内に二所に出たり」と孟遠はすでにこの事を指摘してゐるのである。支考の『笈日記』によると「此句は、初芹といふ事をのべたるに侍らんとたづねければ、たゞ思ひやりたるほつ句なりとあざむかれける。かゝるあやまりも殊におほかるべし」と云い「たゞ思ひやりたるほつ句」と説明してゐるのである。このことは土芳の『赤冊子』にも述べられ、「芹やきに名所なつかしく思ひやりたるなるべし」と記されてゐる。これらによると芹焼の芹から芭蕉は芹の摘まれる筑波根のすそわの田井を思ひやつたのである。『方丈記』や『挙白集』はいつも芭蕉が愛読してゐたものと思はれるから、それらにひかれて芹の連想ですそわの田井のことが思ひ出されたのであらう。濁子・涼葉と囲む鍋焼の芹、この芹が摘まれたであらう遙かなるすそ輪の田井には、既に初氷が結んでゐる事であらうと云ふのである。そして芭蕉の脳裏には芹で有名な筑波山の麓の田井のことなどが想起されたのであらう。

挙りて寒し卵産む鶏　濁子

（釈）○脇句。冬（寒し）。○挙りて　こぞりて、みなことごとく。

（評）日頃は良く産卵する雌鶏が、寒むさうにどれもこれも膨んでゐると云ふ意である。発句の初氷に相応しい時候の様で応じたものと思はれる。宜麦著『続絵歌仙』（文化八年刊）には「脇打添風情」と註してゐる。又、発句の「すそわの田井」の語の鄙びた感じに「卵産む鶏」の語はよく匂ひあつてゐる。

織下す絹をむしろに尋取りて　涼葉

（釈）○第三句。雑。○絹　きぬ。○尋取る　一尋は両手を左右へ伸ばした長さで、約六尺。

（評）昔、農家では母屋や小屋の一隅に織機を据ゑつけ、繭から絹糸をつむいで絹布を織つてゐた。この句は一応織り下してきりのついた絹布を、莚の上で両手でその長さを計つてゐるのである。前句との付合は鶏小舎の傍の小屋の隅の情景であらう。普通第三は発句、脇の景を一転しなければならないのである。この第三はその点、発句・脇の農村的なものにひかれてゐる様で、成功した句とは云へないやうである。

折〳〵すゞむうらの柿の木　蕉

（釈）○初表四句目。夏（折〳〵すゞむ）。

（評）家裏の緑葉を繁らせてゐる柿の木陰に、時々は出て涼を取ると云ふ意である。前句機織りをしてゐる農婦の様であらう。而

もそれを盛夏の時節としたのである。『続絵歌仙』は「居所の変化」とする。庭先から柿の木のほとりの裏口とすれば、景の展開もあらう。

うす月夜干鰯俵のなまぐさき　　子

（釈）○初表五句目。秋（うす月夜）。○干鰯俵　ほしか俵、ほしかは生鰯を砂上に散布し、日光で乾し固めたもの。『大和本草』に「鰯（中略）ほしたるをほしかと云ひ、田圃の糞とす。木綿の糞として尤佳し」とある如く、この頃は主に肥料に用ゐられた。用例「片庇は干鰯積たる呉服棚　珍碩」（『己が光』）「雨風にほしかのかざの暑さ哉　蒙野」（『柿表紙』）

（評）前句は夏、この句は秋で所謂季移りである。普通季と季の間に雑の句を挟む事の多いのも、季の他季への移動がともすると無理を生じ易いからである。ところでこの季移りは、前句のすゞみを残暑の納涼と取り成したわけで、非常にスムーズに運ばれてゐる。尚、「あたりの風情」と『続絵歌仙』に云ふ如く、薄月夜の初更の一時、涼を求めて戸外に出て、柿の木の下に腰を下さうと、そばにあつた俵を敷いたところ、それが干鰯俵であつて、その腥い臭ひが鼻をついたのである。夏の夜の風情としては、『猿蓑』の「市中は物のにほひや夏の月」の句を思ひ出させる様な似通つたものゝある句である。

汐くむ牛も見えぬあさ霧　　葉

（釈）○初表六句目。秋（あさ霧）。

（評）『続絵歌仙』に「場ノ変化」と云ふ如く、前句の薄月を有明の空にかゝつた残月と見、干鰯俵の腥い臭ひから海浜の早朝の景を描出したのである。朝まだきの深い霧に汐をくみに行つた牛の姿も見えないと云ふのである。

露霜の小村に鉦をたゝき入　　蕉

（釈）○初裏第一句。秋（露霜）。○露霜　『万葉集』では霜のとけかゝつて水気を帯びたものを云つたが、『新古今集』以後大体露や霜を意味する様になり、後には単に露の意でも用ゐられた。

（評）鉦を扣き乍ら露霜の降つた田舎の小さい村に足を入れて行くのは、なまいだ坊主、念仏僧であらう。かの蕉門の広瀬惟然は芭蕉歿後、その俳句をつゞり合せて念仏唱歌を作り、それを唱し乍ら鉦を扣き諸国を行脚したと云はれてゐる。さうした類ひのものである。付合は前句に相応しい小村を出し、朝霧の時節の感じに露霜で応じたのである。早朝、深い朝霧を眺めて行く者を、鉦扣きの念仏坊主としたのであらう。尚、前句の朝霧は所謂「鐸物」、この句の露霜は「降物」で、鐸物と降物は二句去りにしなければならないのに、芭蕉はさうした式目に囚はれてゐない様である。この場合も実感本意の彼の態度をよく物語つてゐる。

榎のすへにのこる注連縄　　子

（釈）○初表二句。日　雑。

（評）高い榎の梢に注連縄が残つてゐる。露霜は晩秋のもの（『毛吹草』）であるから仲秋の鎮守の祭りの折のものであらう。田舎の小村によくみられる神社の様である。

求食飛塊鳩の賑はしく　　葉

（釈）○初表三句目　雑。○求食飛　あさりとぶ。餌を求めて飛ぶこと。○塊鳩　『元禄文学辞典』に「どばとの異称。普通の人家に飼ひ、特に仏閣神社に養はれるもの」としてゐるのは『言海』の誤りを犯したもので、真山青果氏が『西鶴語彙考証』で指摘してゐられる如く間違ひである。同書に用例に引く『西鶴織留』の「霜前に土くれ鳩をわざとつとにして山家からくれました」の土くれ鳩をどばとと解する事からして無理であらう。真山氏の言はれた如く雉鳩とすべきである。『本朝食鑑』には、つちくれ鳩は古の俗名で、今の雉鳩と呼ぶ、と注記してゐる。そして常に山林に棲んで人家に近づかず、その味は鳩類のうちで第一と記してゐる。『物類称呼』には斑鳩とし、「つちくればと古俗の称也。東国にてきじばと〻称す、西国にて与物次ばと〻呼」と記してゐる。

（評）餌を求めてつちくれ鳩が賑はしく飛び廻つてゐると云ふのであるが、前句の注連縄の残つた榎の木を、人里離れた山中の神木と解したのであらう。

掘ばひらちにならぬ石原　　蕉

（釈）○初裏四句目。雑。○掘ば　ほれば、掘つても。

（評）川原を掘り起して畑にしようとでもしてゐるのであらうか。石の多い石原のこと、いくら掘つたとてなか〳〵平地にはならない。前句の賑はしく鳩が餌を求めて飛ぶところを石川原にしたのである。山中から川原への情景の展開であらう。

日ざかりは孫に吸筒提させて　　子

（釈）○初裏五句目。夏（日ざかり）。○吸筒　すひづつ、酒や水を入れて携帯する為の筒。用例「九太夫は吸筒を道の友として、寒いも恐いも忘れ」（『俗つ〻〳〵』）。

（評）日中の暑い盛りには孫に吸筒に水を入れて提げて行かせる。勿論石原に働いてゐる人々ところにある。前句の掘つたとて掘つたとて石が出てなか〳〵平地にならない、と云ふところに苦しんでゐる様を見とり、夏の日ざかりとしたのであらう。『続絵歌仙』はこれを「場ノ風情」とみてゐる。

和田秩父とも独若党　　葉

（釈）○初裏六句目。雑。○和田秩父　和田氏、秩父氏ともに源氏の流れをひき、鎌倉幕府の功臣である。古川柳に「尻餅以来と秩父は和田にいひ」の句がある。○若党　若い下男。

（評）たつた一人ゐる若党を、頼朝の功臣でその信頼を受けてゐた和田や秩父の様に頼りにすると云ふ意であらうか。前句の孫に吸筒を持たせて行く老人を武家の御隠居の様とみたのである。或ひは落ちぶれた大家の老人の様かも知れない。

懸乞の来ては言葉を荒シける　　蕉

（釈）初裏七句目。雑。○懸乞　掛取。掛売の代金を取立てる者。○言葉を荒す　物云ひを荒々しくする。口論する。用例「夫婦となり申してより、つひに一度のことばも荒らし申さぬ中に」（『心中二腹帯』）。

（評）当時の庶民階級の大晦日のことを主題とした西鶴の『世間胸算用』には、掛取と掛の払へない貧民の様々な応対の模様が記されてゐる。そして支払不能者に対し掛取がどの様に横着な態度で接したかを覗ひ得るのである。彼等は掛金を取る為めには憐愍

の心も、惻隠の情もないのであつた。芭蕉には他に掛乞を詠んだものに「掛乞に恋のこころを持たせばや」（『深川』）の付句がある。「懸乞の来ては」と云ふのは一人の掛取でなく、節季で掛乞が何人もやつて来るのであらう。掛金を支払へない相手を怒鳴り散らして帰つて行く――。前句の和田・秩父から貧乏曾我の落魄のことを連想したものと思はれる。『曾我物語』の普遍化してゐた当時では、これらのことは大衆の常識であつたであらう。尚、『続絵歌仙』には「内に入たる変化」とある。前句の人物の住居でのこととしたのである。

余所よりくらき月の枝折戸　　子

（釈）○初裏八句目。秋（月の枝折戸）。月の座。○枝折戸　木の枝・柴・竹などを折りかけて作つた戸。

（評）蒼白い月光に人家がうかんでゐる。然し、枝折戸の家をが火燈細めてゐるのか、心なしか他処よりも暗く思はれる。前句との付合は懸乞に荒々しい言葉を投げかけられる人の心の暗さ、その内的な暗い感じに情景で応じた匂附の句である。この句を懸乞に責められてゐる貧しい家の情景と解するのは、余りにも前句に拘りすぎた解であり、打越から落魄貧乏の句となつて進展がない。唯、前句の持つ漠然とした暗い感じに応じた句であらう。『続絵歌仙』は「掛乞ノ変化」としてゐるが、さうすると、懸乞の男が金を思ふ様にとれず、忌々しい気持で枝折戸から帰らうとする、心なしか、月の照りかゝる枝折戸さへこの家は余所よりも暗いと感じ、つぶやく体であらうか。尚、月の座は『三冊子』に「師のいはく月は上句勝たるべし」とある如く、五七五の長句の方に好んで詠まれてをり、芭蕉時代初表五句目、初裏七句目、名残表十一句目の長句がそれ〴〵月の出所とされてゐた。支考によつて後年、初裏の月の座は八句目の短句となつたらしいのであるが、こゝは月が一句こぼされて下句に詠まれたものとして注目される。

蟲とりと知らで蠶の雇はれて　　葉

（釈）初裏九句目。秋（虫とり）。○蟲とり　蟲狩。野に出て秋の鳴蟲を捕へること。「蟲とりや提灯あくる山の池　北枝」（『初蟬』）

（評）句意は明白なる如く、秋の野の蟲取りと知らずに蠶が雇はれたと云ふのである。『続絵歌仙』には「前の人」と註記してゐるやうに、余所よりも薄暗いと月の枝折戸の傍につぶやいてゐる人のことであらう。月の枝折戸と云ふ風流な言葉に虫取りの風流事で応じ、余所より暗きに困惑の様を感じて虫取りに雇はれた蠶と云ふ滑稽な姿を描出してゐる。

松もすゝきも念仏の種　　蕉

（釈）初裏十句目。秋（すゝき）。釈教。

（評）句意は松を見ても、薄を見ても物皆念仏の種であると云ふのである。恐らくこれは前句の蟲取りに雇はれた蠶の姿であらう。蠶と云ふも生来のものでなく老齢によるものであらうか。松や薄に念仏が口先に上るのも寄る年浪の為であらう。尚、『猿蓑』の「餞乙州東武行」の歌仙に『撰集抄』巻五「禅門僧山居往上の事」を踏まへた「すみきる松のしづかなりけり素男」「萩の札すゝきの札によみなして　乙州」の付合があることを付言してお

かう。

富ばなほ命也けり花の陰　　子

（釈）初裏十一句目。春（花の陰）。花の座。○富ば　富めば。○命也けり　命をつなぐことよ。　生きることよ。「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさよの中山　西行」。

（評）咲誇る桜花の下に豪華な宴を催す富有の老隠居、富者は陽春の気に包まれてこの後尚健かならんことを願ふのである。付合は何をみても念仏を誦する楽隠居が、金は豊かでいつまでもと命を願ふさまとも解されるが、併し、前句の仏心深い老人に富者の楽隠居を対称的に続けた対付と俗に云はれる付合であらうか。尚、前句は秋でこゝは季移りである。然し、前句は観想の句であるから無難に季移りが行はれてゐる。『猿蓑』の「灰汁桶」の歌仙の初裏十句目「何を見るにも露ばかり也　野水」「花とちる身は西念が衣著て　芭蕉」や『深川』の「口切に」の歌仙の同じく初裏十句目「露と朽けん一腰の鉈　支梁」「西日入ル花は庵の間半床　也竹」等初裏十一句目、花の座の前が秋で季移りの場合、応々これらの如く一方を観想の句とするのであつて、季移りによる季感のズレを避ける一手法として用ゐられたのである。

破籠はさめぬ鶯のこゑ　　葉

（釈）初裏十二句目。春（鶯のこゑ）。○破籠　わりご。　食物を入れて携帯する器。

（評）野山の散策に行つて折から鶯の声に聞入つてゐるうちに、破籠の弁当はすつかり冷めてしまつたのである。風流な閑人の様であらう。前句にはこの点で相ひ応じてゐる。『続絵歌仙』は「用ノ附」としてゐる。鶯の鳴声と云ふ動的なもので前句の景に応じたとするのであらう。

名雪国は春まで馬の繋がれて　　蕉

（釈）名残表第一句。春（春まで）。

（評）句意は明白であらう。『続絵歌仙』は「破籠ノ変化」と記してをり、破籠はさめぬ、から北国の初春の情景を想起したのであらう。それと共に鶯は報春鳥とも記され、「鶯の来にてや来るけふの春　重頼」「鶯の方より春のたちつてと　昌慶」等、鶯に春の来訪を詠んだ句も多い。こゝは鶯は既に春の訪れを告げてゐるのに、尚、雪国のことゝて雪は残り、馬は厩に繋れてゐると云ふのであつて、そこに多少滑稽感が交へられてゐるのであらう。

日記つまりし一帖の紙　　葉

（釈）名残表二句目。雑。○日記つまりし　日記を記して一ぱいになつたの意。○一帖　半紙二十枚。一帖の紙をそのまゝか、又は半分に截つて真中から折り綴ぢて一冊にしたものであらう。

（評）『続絵歌仙』は「其内ノ用ノ附」としてゐる如く、雪国の人のことであらう。雪に降籠められた長い冬、外出も出来ずに退屈のあまり筆の動きに委せて記してゐた一帖の日記も、もはや余白もなくなつてしまつたのである。退屈な長い雪国の冬の生活がうまく描出されてゐる。

旅瘡やながき五月の船どまり　　子

（釈）名残表三句目。夏（五月）○旅瘡　旅行中に感染した梅毒。

（評）毎日〳〵の五月の長雨に出船する事も出来ず、退屈な停泊

の日が続いてゐる。舟乗り達は仕事もなく港の色街に遊びに出かけてゆく。斯うした生活に何時感染したのか旅瘡がふき出した。全く陰鬱な気分に満ちた句である。前句に長い〳〵冬籠りを連想し、それに「ながき五月の」と響かせたのであらう。『続絵歌仙』には「日記ノ変化」とある。前句の日記のつまつたのを冬籠りの為とせずに、退屈な長い五月の船どまりの徒然無聊のことゝ一転たのである。し

名残りをかせぐ安芸の広島　　蕉

（釈）名残四句目。雑。○名残りをかせぐ　旅立ち迄の残りの日々を精出して働く意。

（評）前句の船どまりから安芸の広島が連想されたのは、当時瀬戸内の諸港は九州への往反などの為繁栄を極め、特に広島の街は著名であつた。こゝには又、さうした旅客・舟乗りを相手とする花街も発達してゐた。宝永三年刊の魯九撰『春鹿集』には広島の遊女数人の発句を収めてゐるのである。恐らく旅瘡から広島の遊女のことを想起したのであらう。年期奉公の明けるのを楽しみに残りの日々をせつせと旅客相手に遊女達は稼ぐのである。尚『続絵歌仙』は「前ヲ商人ト見テ向附」と述べてゐるが、広島に後僅かな滞在の日々を精出して稼いでゐる行商人のことゝ解する事も出来る。さうすれば前句の長雨に退屈してゐる商人と港町に精出して働く商人との対称的な付合である。

音信は見しらぬ伯母もなつかしく　　葉

（釈）名残表五句目。雑。

（評）句意は遠くにゐて肉親の愛情のあふれるこまゞ〳〵した便りを受けると、未だ一度も会したことのない伯母でもなんとなく懐しく思はれると云ふのである。前の広島に非常に遠隔な感じを持ち、そこに伯母などが住してゐるとしたのであらう。涼葉・濁子等大垣を離れて江戸に住してゐた人達には実感のこめられた句であらう。

元米計る酒の奥殿　　子

（釈）名残表六句目。秋（酒の仕込み）。○元米　モトゴメ。酒の原料にする米である。普通地まはりの米を用ゐ、そへ米として秋田・加賀等の北国米を用ゐた。

（評）奥殿は酒を醸す場合の特別な一室であり、そこは女性禁断で神聖な場所として注連などを張つた。そこで新酒を醸す為、元米を計つてゐる。こゝは前句を杜氏の境遇と解し、その様をつけたのである。杜氏は昔も今も、故国を離れ、酒の仕込期間中長い間住込み生活をするのである。それで時たまの肉親の音信など殊に懐しい気持で読み入つたのであらう。

焼たてゝ庭に鱧するくれの月　　蕉

（釈）名残表七句目。秋（くれの月）。○鱧　はも。古名はむ。海産魚で形は鰻の如く円く長。大なるは三尺をこゆると云ふ。主に四国・九州・瀬戸内海に産し、夏に漁獲の多いところから後に俳諧では夏の季物として用ゐられてゐる。

（評）鱧は骨切にして鰻の蒲焼の様に醤油で焼き、又は擦りつぶして蒲鉾の材料として用ゐた。この句意は夕暮の月を空に頂いた庭先で、鱧を焼いたり擦りつぶしたりしてゐると云ふのである。恐らく酒宴の為の酒の肴をつくつてゐる様と思はれる。前句の酒

の仕込から酒を作る当日の祝事の準備の様を付けたものと思はれる。

まき藁まくも肌寒きかぜ　　葉

（釈）名残表八句目。秋（肌寒き）。○まき藁　藁を巻いて束ねたもので、射術を習ふ的に用ゐた。「巻藁の拳さたまる闇の音神叔」（『句兄弟』）。

（評）片肌抜いで巻藁を巻いてゐる。夕暮の吹きくる風に肌寒さが感じられる。秋も末であらう。弓の稽古もこれからである。前句の祝事の馳走を、こゝでは一変して武士の弓場開きの為のものとしたのである。『続絵歌仙』に「変化武家」と記してゐるのはかうした情景の展開を意味するものと思はれる。

寄り聟は仮り諸太夫に粧ふて　　子

（釈）名残表九句目。雑。○寄り聟　意味不明。『倭訓栞』に「寄は寄寓の謂」とあるので嫁のところに寄寓してゐる聟の意かと考へたが、用例がなく不明である。『続絵歌仙』に「寄聟ハ舅ヘ始テ来タルヲ云」とあるが、これによると他処から嫁の里へやつて来た聟の意であらう。○諸太夫　五位の侍の通称である。

（評）寄り聟の意が詳かでないので解し難いが、前句の弓場開きの為に嫁の家に寄寓してゐる聟が、仮りに諸太夫の粧ひでこれに加はつた意と解される。『続絵歌仙』の寄聟の意なら弓場開きとは関係なく、武家の習俗の一つと解されよう。即ち初あるきに聟が諸太夫の粧ひで舅を訪れたと云ふ意になる。

うき名は辰の市で恋する　　蕉

（釈）名残表十句目。雑。恋の句。○辰の市　大和国添上郡辰市村、往昔辰の日にこゝに立つた市、『拾遺集』の「なき名のみたつの市とは騒げども今また人をうるよしもなし」等、辰の市を詠んだ古歌も多い。

（評）句意は恋のうき名を流して辰の市で恋をすると云ふのである。前句の諸太夫は寺侍に多いので、寺侍から奈良が連想され、大和の辰の市が想起されたのであらう。『続絵歌仙』には「古代に取なしたる附方」と見える。かの『枕草紙』に「市は辰のいち」とあるが、諸太夫と云ふ古めかしい言葉に相応しい恋の場として往昔の辰の市が附けられたのであらう。

よひ縞ともやうを褒て詠やり　　葉

（釈）名残表十一句目。雑。○よひ　良い。

（評）恋しい女の着物の縞の模様を褒めて詠入るのは、恋に身を浸す男性、それも辰の市に浮名を流してゐる男であらう。前句の恋する男の女に現を抜かす追従軽薄な様であらうか。又『続絵歌仙』は「変化市ノ風情」として二人の女の姿を描いてゐる。この様に辰の市の女同志の風情とも解し得るであらう。

葉茶壺直す床の片隅　　子

（釈）名残表十二句目。雑。○葉茶壺　抹茶壺に対して葉茶を入れる壺を云ふ。

（評）『続絵歌仙』に「内ノ風情」と註してゐる。前句の女の着物の縞をこの句では茶席での古代切れの縞と見かへてゐる。参会した風雅人達がしきりに主人の出した名物切れの縞を賞翫してゐるのである。そして、やがて茶席もすんで床の片隅に葉茶壺が直

される。

ほとゝぎすすはやと蚊帳釣かけて　　蕉

（釈）名残裏第一句。夏（ほとゝぎす）。

（評）夜分、蚊帳を釣つてゐると、折から空を横切つて時鳥の鳴声が響いて来た。それ時鳥だ！と蚊帳を釣かけたまゝで鳴声に耳を傾ける。蚊帳を釣かけたまゝ時鳥に聴き入るところに、この人物が自然に風物に関心を持つてゐる風雅人である事が覗はれよう。付合は前句の茶人・風流韻事を解する人のことを点出したのである。『続絵歌仙』に「用ノ附」と云ふのもこの事を云ふのであらうか。

湖水もしらむ瀬田の朝駕　　葉

（釈）名残裏二句目。雑。○しらむ　あかるくなる。○瀬田　近江八景の一。唐橋で著名である。

（評）朝駕を急がせて瀬田に来かゝると、東天の明からむにつれて、湖面はしら〳〵と明かるくなつていく。折しも湖の空を時鳥が鳴声を立てゝ飛翔し湖上に姿を消した。この句の付合の重点は前句の時鳥にある。時鳥の延長の一景で、湖水や瀬田の朝駕を描くことによつて趣深い風情となつてゐる。尚、前句の「すはや」の言葉の勢ひに「朝駕」はうまく応じてゐるやうである。

うす雪のうへに霰のころ〳〵と　　子

（釈）名残裏三句目。冬（うす雪　霰）

（評）『続絵歌仙』は「伸ヒ」と説明してゐる。これは前景の進展の意であらう。スクリーンの景がごく自然に情感を破壊することなく、他のものゝ上に移行していくのである。前句は時鳥の句に付く時は夏の早暁の景であつた。ところが、こゝではそれを冬の早朝の様に一変してゐる。湖畔の街道を進む駕、四辺の景は薄雪にこめられてをり、折から霰がころ〳〵と地面に降り注いだ。或ひはこれは瀬田の唐橋の橋板の上ででもあらうか。遠く比良の高嶺は雪を載いてゐる。

俵の塵をたゝく著る物　　蕉

（釈）名残裏四句目。雑。○著る物　着物。

（評）前句の湖畔の薄雪・霰を市井のそれと見かへたのである。『去来抄』に見える凡兆の「雪積む上の夜の雨」に芭蕉が「下京や」の冠を置いた如く、薄雪の上にころ〳〵と霰が降り注ぐ様には又庶民的なにほひがある。米屋のことであらうか、俵を積み、又は運び了つて着物についた塵をばた〳〵と払ふ。この句の「たゝく着る物」は前句の「霰のころ〳〵と」に響き、その言葉の響きをうまく受止めてゐる。

折る花に子共のすがる袋町　　葉

（釈）名残裏五句目。春（折る花）。○袋町　路の行きどまりになつてをつて、通り抜けることの出来ない町。

（評）壁の上から万朶の花が道に枝を拡げてゐる。ふとした徒ら心から手を伸ばして花を折らうとすると、軒下で遊んでゐた身形りの粗末な子供達が、わーつと集つて来た。そして着物にすがり我も〳〵とその花の枝を欲するのである。これも陋巷の出来事であらう。前句の風情に相応しい場の付合である。

若松うゆる天神の宮　　子

（釈）揚句。春（若松うゆる）。

（評）二月二十五日の天神御忌の祭りの日のことであらうか。天神宮の境内に今年も緑濃い若松が植ゑられた。勿論、子供達も境内には多く参集してゐることであらう。『続絵歌仙』は「あたりノ変化」と記してゐる。それは袋町を出た界隈の小さい天満宮のことと思はれる。尚、子供から天神・若松などが想起されたのであらうか。常套の目出度い句で一巻が満尾させられたのである。

扨て、一巻の評釈を了つて全般的に眺めてみると、本歌仙は割りに土臭い庶民的な題材が多く詠み込まれてゐることが理解されよう。本歌仙の制作が芭蕉閉関後の「軽み」の諸連句に繋がるものとして当然のことである。

又、旅躰、病躰、恋句など適宜適当に詠み込まれてゐる様である。併し、「織下す」の句に「折〳〵すゞむ」と同じォ音で続けたり、「柿の木」に「なまぐさき」と同じキ音で留めたり、その他口調や語呂の点でなほ充分と思はれないところもある。本歌仙が芭蕉生前の集に収録されなかつたと云ふのも、『猿蓑』『炭俵』所収の諸歌仙の如く、充分なる芭蕉の推敲の手を経てゐなかつたのかも知れない。謂はゞこれは一つの習作であつたのであらうか。

（完）